



## 2016 特別聖年巡礼の旅 レポート

### 「聖なる扉と虹色の祝福」

ヴァチカン・サンピエトロ大聖堂まえの広場は人々の静かな熱気に包まれていました。この日の空は5月半ばの抜けるような青、わずかに薄い羽衣のような雲がたなびき巨大なクーポラも聖人たちの彫像も、今か今かとその時を待つ大群衆をじっと見下ろしています。前方に置かれた2台の大きなモニタースクリーンの画面が揺れると同時に地鳴りのような歓声があがりました。

パパさまです！広場は縦横に柵で通路が区切られており、それはパパ様がオープンカーに乗られて人々に祝福を下さるために通過される道路なのでした。

ちょっと前屈みで慈愛に満ちたあのお姿がモニターに映し出されます。「どこ？どこ？」と実際に通過されている場所をみなが探します。頼もしいSPたちに護られた白いオープンカーは想像していたよりはるかに速いスピードで走り回るのでカメラにお姿を捉えるのは大変です。数十枚夢中でシャッターを切ったうちの1枚に幸運にもお姿が写っていて、しかも祝福のポーズだったのを知ったのはずっと後のことでした。

午後になって「聖なる扉」をくぐる順番を待つ私たちの頭上の薄い雲の縁が雨も降らないのに虹色に輝いているのを目撃しました。「空を見ろ！鳥だ、人だ、いや・・・」と、スーパーマンが飛んできたってこれほどではないだろうという驚きにつつまれたのはご想像にかたくないでしょう？悲惨なテロや無情な自然災害が渦巻く現代、この年を聖なる扉を開く大聖年と定められたパパ様の強い思いとメッセージを改めて感じました。

11日間2500 歩、132000 歩をカウントした巡礼のバス旅はこうして始まりました。ローマをスタートし、ルルドが終着地です。途中サンジョバンニ・ロンド、ロレート、アッシジ、フィレンツェ等の名だたる巡礼地を訪れ、イタリアから南仏ニース、マルセイユを通過してルルドに至るハードですが内容の濃い「祈りの旅」となりました。各地のご聖堂で同行の神父様5人の司式によるプライベートミサに、フィレンツェのサンタマリアデルフィオーレ大聖堂では現地司祭との共同司式によるイタリア語ミサに与りました。聖なるヴァチカンを始め、日曜日の家族連れで賑わうフィレンツェもこの都市もミゼリコルデイスのロゴが掲げられ、ミゼリコルデイスの聖歌と祈りが捧げられていました。

### 「ルルドの奇蹟」

クリスチャンであれば、ルルドの少女ベルナデッタと聖母マリア様の出会いの逸話、さらにルルドの水と幾多の癒しの奇蹟をご存知ない方はいらっしゃらないでしょう。私たちの旅にも「ステージ4 だった

甲状腺癌がうそのように治って、そのお礼参りです。」とニコニコされていた方がおひとり、その方はご友人と3日間旅程を延長してサンチャゴとファティマに行かれるというお元気さでした。

マルセイユから600キロを走ってたどりついたルルドでの宿泊先は小さな修道院、ユースホステルのような簡素なお部屋の壁には十字架とマリア様の絵がひっそりとかけられ自然に祈りの気持ちを誘います。シスター方の手作りシャキシャキサラダと焼きたてのバゲット、イタリアからずっと生野菜に飢えていた私たちの胃袋は十分過ぎるほど癒されました。夕食後は休むまもあらばこそ、夜9時近いというのに西日の眩しい参道をマリア・プロセッション（ろうそく行列）に向かいました。大聖堂前の広場は小さな町のひとつも入りそうな広さで、手に手にろうそくを掲げた人々が続々と終結し、夕闇が訪れたところに車椅子の行列と共に行進をはじめました。各国語の“あめのきさき”が歌われ、「アヴェ、アヴェ、アヴェマリア」はもちろん全世界共通語、大合唱となりました。「ミゼリコルディア・デイ・おおさか」の綺麗な真白い大きな旗を掲げて先導していた神父様お2人が招かれて大聖堂の両翼に延びるアーチ型の階段の中央に立ちました。時間が止まってしまい、疲れも忘れ心の屈託がすべてからっぽになるような感覚です。

翌日はグロットの早朝のミサと小教区教会での2回のミサに与り、ミサの後添乗していただいたソプラノ歌手の福田さん、フランス在住のオルガニスト、サカイカオリさんによる「聖母マリアに捧げるコンサート」がありました。このコンサートの真っ只中で私に大きな変化が訪れました。実は十数年ほど前から次々と今でも言葉にできないショッキングな経験をした後、私はずっと無感情のアンドロイドのように内面の自分を閉じ込めてきたようです。海外旅行といえばゴルフとショッピングばかり

（主よ、お許ください！）だった私が、巡礼参加を思い立ってからもモヤは晴れず、自分もどかしくて情けなくなりました。もちろん教会のミサやご教義の勉強会にはこれまでも欠かさず出ていましたが、本当の自分がどこにいるのか分かりません。鈴を転がすような(文字通り)福田さんのマリア様への賛歌が俯いた私の耳元を通り過ぎていきました。すると突然、音響効果のすばらしいお御堂に強いバッハのオルガン曲の旋律が響き渡りました。最初の音を耳が捉えた瞬間、いきなり屈み込んでいた私の脊髄がピンと伸び、8章節を過ぎる頃には、下をむいていた眼球が真っ直ぐ前を向き（もしかしたら本当に髪の毛が全部逆立っていたかも）、涙と鼻水でぐちゃぐちゃの私の心の中心に静かに青白く燃える炎が点つたことに気が付きました。否定と自己憐憫が微塵に砕け散っていきました。

それはとても大きな気付きだったと思います。我知らず身に纏っていた不遜な自我を脱ぎ捨て新しい自分を再生しなければならぬという苦しみを伴いましたが、難病を治していただくにも匹敵するほどの魂の癒しでした。はずかしながら、「生きて」いるのではなく、神に招かれ「生かされている」存在の意味を始めて理解できた瞬間でした。同行の皆様が見ず知らずの俯いた私をずっと

支えてくださったことも痛いほど感じました。聖なる扉から **2500** キロの巡礼の終わりにこの気付きに導いていただいたこと、これが私の「ルルドの奇蹟」、マリア様のお望みだったと信じます。

訪問した各地の教会建築群の規模、人々の信仰の厚さを知るにつけ、キリスト教の歴史にかけられた膨大な時間と金額を思い、気が遠くなりそうです。それをしてもなお、人間の力だけではなしえなかったに違いない偉業に働く神の御業と深遠さを深く感じた旅でした。

この旅ではじめてお会いしたイグナチオのお仲間久保さん、バスで同席し話しのはずんだマリアさん、全国各地の教区から参加された **39** 人の信徒の皆様（多くの方がイグナチオ教会をご存知だったのは嬉しい驚きでした）、**5** カ国から赴任された愉快的な **5** 人の神父様、この旅を企画運営、そして添乗されたコミュニティのスタッフの皆様、ホームメイドなレシピで胃袋と心を満たしてくださった修道院のシスターたち、ハイウェイポリスを言い負かした？ 屈強のドライバー、フランコさん本当にありがとうございました。

神に感謝

東京チーム 松澤ゆきこ